

赤ちゃんの 視力検査について



視能訓練士
岩本
まい

生まれたばかりの赤ちゃんの視力は光がわかる程度であり、その後、物を見ることにより発達し、6か月で0.1、2歳で0.5、3歳で1.0となるといわれています。

視覚の発育期は出生直後から6歳頃とされ、とくに1～2歳までが視力の発達が最も著しい時期です。

その発育の期間に、強い遠視や乱視、斜視、白内障など何らかの邪魔が入り、両眼とも同じようにくっきりと見ることが出来ないと弱視になります。弱視とは、視力の発育不全で将来眼鏡をかけても視力が出ない状態です。そのため、赤ちゃんの頃にきちんと見えているか確認することは、とても重要です。

眼科での視力検査は、「ランドルト環」というアルファベットのCのような記号の切れ目を答えてもらう方法が最も一般的です。しかし、赤ちゃんにはもちろん難しく、ランドルト環での視力検査が正確に出来るようになるのは、個人差はありますが3歳半頃です。

自覚的な検査ができるようになるのは2～3歳になってからで、それまでは反応を見る他覚的な検査を行います。

①新生児～乳幼児

光をあてて眩しがるかを見ます。(対光反応)

また、片眼を隠してみて、左右で反応が違うかを確認します。視力に左右差がある場合は、良い方の眼を隠した時に機嫌が悪くなったり、隠している方の眼で見ようしたり、隠している方の眼を手で払おうとする動きが見られます。(嫌悪反応)



②3.4か月頃～

意識的に物を見ることが出来るようになる時期なので、音の出るおもちゃや光などを見続けられるか(固視)、それらが動いた時に追いかけて見続けられるか

(追視)、それらの反応に左右差がないかを確認します。

③4.5か月頃～

目の前で白黒の縞模様を回転させた時に起こる、生理的な眼の揺れ(視運動性眼振)を確認します。

縞模様カード法：赤ちゃんが無地より縞模様を好む傾向があることを利用した検査です。



縞模様と灰色のカードを出して縞模様の方を見た眼の動きで判定します。1～2歳になれば縞模様を理解し自覚的に答えてくれるようになります。

④2歳頃～

森実ドットカード：眼の大きさと位置が異なるうさぎのカードを30cmの距離で見せて、カードについた眼がわかるかどうかで視力を測ります。



⑤2歳～ランドルト環ができるようになるまで

絵視標：サイズの違う絵、図形が答えられるかで視力を測ります。



眼科に来院しての検査というのは、子供にとっては興味のないことが普通で、また飽きやすい、というのも正常な反応です。一度の検査では判断がつきにくく、何度も来院して慣れてもらう場合も多いです。

視覚の発育不全が疑われる場合は、視力検査だけでなく、眼の度数(屈折)を測る検査や眼の位置や動きの検査、眼底検査などを行い、総合的に判断します。

7か月、1歳半、3歳、就学前に行われる健診をきちんと受けすることがとても重要ですが、乳幼児の視覚に関して何か気になることがあれば、眼科受診されることをお勧めします。

くす通信

第241号
2021年3月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

眼科より

ドライアイについて

視能訓練士より

赤ちゃんの視力検査について



3月

「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹もあります。

また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしづみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽に読み下さい。

眼科の紹介

ドライアイについて

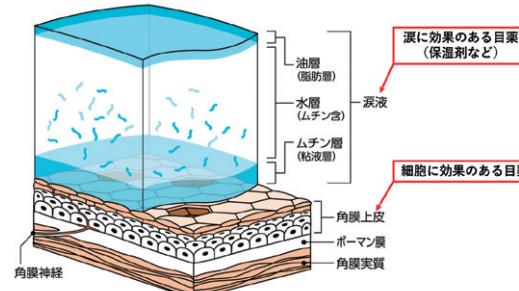
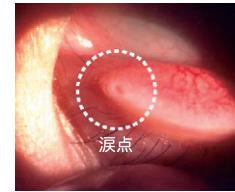
眼科部長
榮木 大輔

ドライアイはその名通り乾き目であり、多くの方がご存じの病名かと思います。しかし、その実態は非常に厄介な病気で、単に目が乾くだけでなく、乾きが非常に多彩な症状を引き起します。日本では1000万人以上がドライアイにかかっていると言われており、特にデスクワークをしている方の3人に1人がドライアイであるという報告もあります。「ドライアイ」「乾き目」は以前からあるありふれた病気ですが、2016年に診断基準見直しという転機がありました。新しい診断基準は「①目の不快感や視機能低下などの自覚症状がある」「②涙液層破壊時間が5秒以下である」の2点になります。難しそうな言葉が並んでいるため気づきにくいのですが、大事な点は「涙が少ないと」は診断基準から外れたということです。数々の研究でドライアイとは、単純な涙の量の減少が原因ではなく、涙の質が低下することや目の表面の細胞の機能低下などが原因であることが分かってきたからです。

先に述べましたが、ドライアイの症状は非常に多彩です。まず、目が乾燥することで目がショボショボします。まぶたと眼球がこすれることでコロコロ感（異物感）がでます。乾燥により目の表面が凸凹することで視力低下やまぶしさ、更にそれらの見えにくさから来る目の疲れ、眼表面が荒れることで目の痛みまで感じることもあります。更に、乾燥の刺激が強くなると涙の分泌が増えることもあります。なんと「涙があふれるドライアイ」も存在します。

ドライアイの検査は、①問診で乾燥に伴う目の症状の確認②涙を染める試薬を使うことで涙の質の評価という二段階で終わります。体の病気の一環として発生するドライアイもあり、その場合には目尻に紙や糸を挟んで涙の分泌量を測定する検査を組み合わせることもあります。

治療は目薬が中心で、軽症では保湿のための目薬だけで十分な場合もありますが、ある程度強いドライアイでは目の表面の細胞に働きかける点眼を組み合わせたり、眼軟膏という目の塗り薬を用いる場合もあります。更に、重症例では涙点プラグという器具で目頭にある涙点という穴に栓をすることもあります。



その他、生活上の注意として、エアコン・クーラーなどの風を顔に浴びない、空気が乾燥する季節には眼鏡（度無しでも可）を掛けるといったこともドライアイの症状を和らげることに役立ちます。

上記症状でお困りの場合には、ぜひ眼科に相談してみてはいかがでしょうか。

やってみよう！ドライアイの予防 日常生活できる予防法を知ろう！

風を直接顔に浴びない	まばたきの回数を多くする	目を休ませる
長時間、画面を見るときはこまめに休憩を取ろう！	部屋の乾燥を防ごう！	自分が疲れた時は、蒸しタオルなどをまぶたの上に乗せて休憩しましょう。 タオルの温度は40°Cぐらい、5分～10分程度が宜良。 最近では、ドラッグストアなどで販売されている使い捨ての蒸気が出るアイマスクもおすすめです。時間は10分持続します。使い捨てで持ち運びができる、場所を選ばないので、いつでも温めることができます。

眼科は感覚器センターの1部門として、他の診療科と協力しながら診療を行っております。外来診療は、眼科医3名、視能訓練士2名、看護師3～4名、医師事務補助者1名で行っています。視力、眼圧、細隙灯顕微鏡検査、眼底検査、視野検査といった基本的な検査はもちろん、疾患に応じた他の眼科精密検査も行います。また、場合によっては、血液検査やCT・MRIといった目以外の検査も組み合わせて行うこともあります。入院診療に関しては、白内障手術の方が中心ですが、認知症や精神疾患等で個人病院では手術できない方を多く引き受けていることが当院の特徴です。その他、眼の外傷や入院での薬物治療が必要な方の入院を引き受けております。

国立病院機構熊本医療センター

- 診察日 月曜日～金曜日
- 休診日 土・日曜日及び祝日
年末年始（12月29日～翌年1月3日）
- 受付時間 8：15～11：00
- 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5
TEL 096(353)6501（代表）
FAX 096(325)2519
HP <https://kumamoto.hosp.go.jp/>

※形成外科のみ受付は、水曜日以外の13:30～16:30となります。

※一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。